

刑余者などの人が地域の人々とともに生きる地域をどうつくるか

提言

非行や罪に問われた人たちが
立ち直る最高の薬は、
普通の人として付き合うことである。

登壇者

【進行役】	堀田 力	(公財) さわやか福祉財団会長
	村木 厚子氏	津田塾大学客員教授
	玄 秀盛氏	(公社) 日本駆け込み寺代表
	中本 忠子氏	(特非) 食べて語ろう会理事長
	西村 穰氏	(認定特非) 全国就労支援事業者機構事務局長
	山本 譲司氏	作家、福祉活動家

議事要旨 堀田 力

「刑余者などが偏見を受けず、普通に暮らせる共生社会になれば、認知症者や障がい者なども暮らしやすい包摂社会になるでしょう」と進行役が口火を切った。

●「刑余者などが再生する基本は、就労です」と、全国就労支援事業者機構の西村穰事務局長が就労支援活動の実績と課題を語った。10年前法務省・厚生省・経団連などのバックアップでNPOとして発足した機構は、今や協力雇用主2万2千企業、雇用受入れ実績は年間約3千2百人。「問題は長続きするかどうかで、彼らが楽しく働けるかが決め手です。企業は、先輩企業のやり方を学びながら頑張っており、詐欺、窃盗などをやって辞める例は、1年に1つあるかどうかです」。

●機構に10年先駆けて歌舞伎町に日本駆け込み寺を設立、数万件に及ぶ難しい相談に対応してきた玄秀盛代表の発言には、身体を張って刑余者の生活を守ってきた努力が地域の偏見のために裏切られる悔しさがにじんだ。

「長い時間故郷から切り離されてきた者ほど故郷を愛おしく思うのに、故郷に帰れない。家族に迷惑がかかることをおそれるからです。その結果、見知らぬ大都市の孤独に負け、元の道に戻ってしまう。地方再興の活動をされるなら、地域が面として人を丸ごと受け入れる絆づくりに挑戦してほしい」。

●厚生労働事務次官を辞めた後、「若くて素直な女性受刑者たち」などを支援したいと「共生社会を創る愛の基金」と「若草プロジェクト」を設立して運営する村木厚

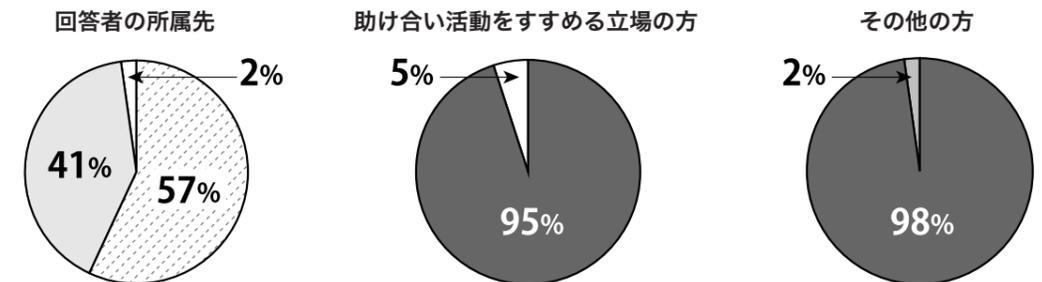
子さんの言葉は鋭い。「日本のすべての公的福祉はJKビジネスのスカウトのお兄さんに負けています」。SOSを発することのできない刑余者たちに声をかけることから始める必要があるという。そして、刑余者たちに必要なのは地域に居場所と出番があることだという。「定年退職後のお父さん方と問題は同じです」。

●もう50年近く、広島市の自宅などで毎日非行少年たちに食事を提供し続けてきたNPO法人食べて語ろう会の中本忠子さんは、「子どもたちは腹が減るから悪さをするんです」と断言される。だからいつでも彼らに自宅を開き、居場所を提供してきた。「大切なのは、常に声かけし、孤独にさせないことです」。

●元国会議員の作家・福祉活動家山本譲司さんの支援活動も20年近くになり、その提言で全国の刑務所にソーシャルワーカーが置かれ、各都道府県に矯正と福祉をつなぐ地域生活定着支援センターが設けられた。「司法は罪を見、福祉は障がいを見、市民は自分と違うところを見る。自分と同じ人として見るのがインクルージョンです」。

●最後に進行役が「認知症に関する大綱でサポーターが認知症者の外出や居場所へ通う支援をする仕組みができたが、刑余者等についても地域の有志による伴走支援の仕組みがほしい」と発言。各パネリストに共通する思いを提言にまとめた。

アンケートの結果 参加者概数：185名 回答者数：116名



■ 寄せられた声から

- これだけのパネリストを集めるとは！まさに驚きです。すごく勉強になりました。玄さんの話とくに凄かったです。村木さんのおっとりとした話しっぷりは素敵でした。
- 再犯者も退転男性も支援のあり方は同じ。